

はじめに

梁川 英俊 YANAGAWA Hidetoshi

本書は2011年12月12日（月）に鹿児島大学稲盛会館で開催したシンポジウム『伝統歌謡の継承と地域の創造』の報告書である。当日配布したパンフレットには、シンポジウムの趣旨をこう書いた。

俗に「歌は世につれ世は歌につれ」と言います。たしかに歌の流行は世の移ろいとともに変化します。そのなかで、長いあいだ人々にうたい継がれているのが伝統歌謡です。現代において、そうした古い歌をうたい続けることにはどのような意味があるのでしょうか？

もちろん、伝統歌謡はどの地域にも残っているわけではありません。歌は人がうたうのをやめれば消えてしまいます。とくに地方の場合、住民の高齢化や人口の減少など歌の継承を妨げる要因にはこと欠きません。歌は放っておいても残るものではないのです。歌が残るのは、それを残したいと望む人たちがいるからにほかなりません。

伝統歌謡の継承には、このように歌の力のみならず、他のさまざまな力が働いています。古い歌が忘れられずにうたい継がれているということは、実は大変なことなのです。

私たちの鹿児島県には「おはら節」や「はんや節」をはじめとしていろいろな歌が残っています。また奄美諸島では、島唄や八月踊りなどの伝統歌謡が継承され、地域のなかで重要な役割を果たしています。



シンポジウム『伝統歌謡の継承と地域の創造』のポスター

人はなぜ伝統歌謡をうたい続けるのか？ このシンポジウムでは、この根本的な問題に〈地域の創造〉という視点からアプローチしてみたいと思います。

そのために私たちは、世界中から4つの地域に協力をお願いしました。まずは地元鹿児島県から奄美大島、北米大陸からカナダのニューファンドランド、アジアから隣国の韓国の全羅南道、そしてヨーロッパからはフランスのブルターニュです。

いずれも一時は衰退の危機にあった地域の伝統歌謡を復興させ、各々のアイデンティティの支えにまで高めることに成功した地域です。

さらに、歌ではありませんが、「新しい伝統の創造」の一例として、アフリカのギニアから鹿児島県三島村に伝えられたジャンベにも登場していただきます。

各地域から招待された代表的な歌手やミュージシャンの演奏と、専門の研究者たちによる解説やパネル・ディスカッションは、それぞれの地域の歴史や文化について多くのことを教えてくれるのみならず、現代にあって伝統音楽を継承する意義とその地域への影響を考えるための貴重な機会になることでしょう。

たかが歌、されど歌。歌は地域を救えるか？——このシンポジウムを通して、皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

最後にひとつお知らせです。12月13日夕に同じ出演者によるコンサートを開催します。シンポジウムでは時間の都合で演奏できなかつた多くの歌や音楽が聴けるチャンスです。入場無料で予約の必要もありませんので、こちらも振るってご参加ください。

このシンポジウムのために予定されたメンバーは13人。そのうち外国からの招待者は世界の4地域から6人と、地域色も国際色も豊かなイベントとなった。シンポジウムは12時の開始で、各地域の持ち時間は55分、終了時刻は18時と相当な長丁場であったが、大変に充実した内容となった。以下、当日のプログラム順に各地域の報告をかいつまんで紹介したい。

鹿児島県・奄美大島

トップバッターとして登場していただいたのは、地元鹿児島県の「奄美民謡」である。ゲストとして、島唄の代名詞的存在である唄者の坪山豊氏と相方の皆吉佐代子氏をお招きできたのは幸運であった。お二人には、シンポジウムを開始するに当たって、最初に祝い付けの歌も歌っていただいた。その後、梁川がパワーポイントを使用しな

がら、対談形式でお二人に話を聞いた。

最初に確認されたのは、奄美民謡には八月踊り歌といわゆる島唄、つまり三味線歌＝遊び歌の2種類があるが、双方とも「歌で会話をする」という共通点をもつことである。その上で坪山氏から、特に島唄の継承においてはこの基本が忘れられていることが指摘され、「いまの相手と別れて、来年あたり結婚しようじゃないか」という冗談をネタに皆吉氏との歌掛けの実演が披露された。

島唄はかつて娯楽が少なかった時代の遊びであり、歌掛けや歌遊びなどを通じて口承によって集落単位で伝承されてきた。その頃に尊敬されたのは歌や歌詞をよく知る「ネンゴシャ」であり、声が良いだけの人は「クイシャ」と呼ばれて蔑まれたという。しかし今日の島唄教室やコンクールでは、むしろクイシャに光が当たり、ネンゴシャ的な側面がおろそかにされる傾向がある。今年81歳になる坪山氏自身が1980年に第一回奄美民謡大賞を受賞したコンクール世代であるが、コンクールのあり方は今後見直されるべきであろうという指摘がなされた。

伝承形態の変化ということでは、レコードの影響も大きい。それにより皆が武下和平氏のようなスター唄者の歌を模倣するようになり、歌の地域的な特徴の継承が難しくなった。わずかに残っているのがヒギャ節とカサン節の区別であるが、主流はコンクールで舞台映えるダイナミックなヒギャ節で、昔は歌われていなかった地域でも歌われている。それはもはや地域性ではなく、単なる歌の様式の違いとなってしまったと言えるだろう。

話題はさらに元ちとせや中孝介等の活躍にも及び、彼らのおかげで全国的に島唄の認知度が上がり、また若い人たちにも島唄が浸透して、コンクールがさらに活況を呈していることなども指摘されたが、このような状況を踏まえた上で、最後に坪山氏から、奄美島唄の特徴をしっかりと伝えるためには、これまでないがしろにされてきた、歌に関する知識や歌詞を大切にすることを復活させることが急務であり、いま一度島唄を生活の場に取り戻さねばならないと、歌掛けの重要性が再度強調された。

しかし、その一方で、歌の実質をなす奄美のシマグチの継承は、とくに大島の各地域においては現在危機的な状況にあり、今後シマグチは島唄という入口を通してしか



奄美大島の報告
坪山豊氏（中央）と皆吉佐代子氏（右奥）

ほとんど残らないのではないか、という率直な危惧も語られた。

カナダ・ニューファンドランド

ニューファンドランドからは地元の代表的な歌手であるジム・ペイン氏に来ていただいた。解説はオーストラリアのサザンクロス大学教授フィリップ・ヘイワード氏が担当する予定であったが、直前に家族の病気で来日できなくなったため、本来通訳担当であった静岡大学情報学部教授の森野聡子氏が、急遽解説を兼ねることになった。本番まで数日しかないという状況のなかで、ヘイワード氏の原稿を元に見応えのあるパワーポイントを作ってくれた森野氏には深く感謝したい。

ニューファンドランドにヨーロッパの人々が訪れるようになったのは15世紀のことである。周辺の海域でタラ漁が盛んになり、ヨーロッパ人の重要なタンパク源となったため、1583年にイングランド初の海外植民地がニューファンドランドに築かれたという。17世紀になると、タラ漁に従事するイングランドからの入植者が沿岸部のアウトポートと呼ばれる土地に住み着いた。海上交通しかない時代、それぞれのアウトポートには独自の言語や文化があったという。

なおニューファンドランドにおけるヨーロッパ系住民の構成比は、約60%がイングランド（特に南部）、30%がアイルランド（特に南部）、残りがスコットランドとフランスからの入植者である。

このような歴史から、現在のニューファンドランドの伝統歌謡には、イングランドやアイルランドからの入植者が本国から持ってきた歌と、彼らが島に来てから作った歌の2種類がある。しかしアイルランドから入ってきたゲール語の歌に関しては、すでに伝承が途絶えてしまい、現在残っているのは英語の歌だけだとのことであった。

ステージではペイン氏が古いイングランドの歌“*I've been a Gay of young fellow*”



ニューファンドランドの報告
ジム・ペイン氏

をはじめとして何曲か歌を披露し、森野氏はペイン氏を“*tradition bearer*”、すなわち「真に伝統を体現している者」と賞賛するヘイワード氏の言葉を紹介しながら、彼が200人程度の住民しかいないコミュニティーで育ち、そのなかで付け焼刃ではない本物の伝統歌謡を習得した人であることを強調した。

ペイン氏はシンガーソングライターでも

あり、“Empty Nets”をはじめとする自作曲も披露したが、ニューファンドランドの伝統音楽の未来については楽観的で、最近では若い人たちも興味を持ち始めており、また伝統音楽だけを放送するラジオ局も創設されて、未来は明るいと思うと語った。

ギニア＝三島村

三島村からは「みしまジャンベスクール」校長の徳田健一郎氏が登場し、「三島村とアフリカの太鼓——新しい伝統への取り組み」と題して、三島村とジャンベとの関わりを中心に話しをした。

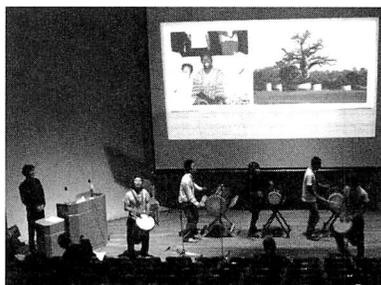
三島村にジャンベという楽器をもたらしたのは、ギニアの「ジャンベの達人」(Djembe Fola) ママディ・ケイタ氏である。1994年、「日本の田舎の子供たちと触れ合いたい」という希望から三島村を訪れ、子供たちと一週間のワークショップを行い、共に全国ツアーにも出かけた。最後のコンサートでは全員が感動から抱き合い、ケイタ氏も自分が育った小さな村の話をしながら、「みんなも故郷を大切にしてほしい」と語りかけたという。

このような経験に触発されて、本格的にジャンベに取り組むようになった徳田氏は、その後三島村に設立された「みしまジャンベスクール」の指導者になり、さらに海外でも修行を積み、ケイタ氏からスクールのディレクターとしても認められるようになった。

氏は三島村の子供たちと共にアフリカ・ギニア共和国のケイタ氏の村を訪れたときの様子を、ビデオを流しながら語ったが、なかでも、ジャンベのリズムの原型が、毎朝村の各家庭で臼でトウモロコシの団子を作る時に降り下ろされる木の棒のリズムであるという言葉は印象的であった。

さらに氏はジャンベのリズムについても言及し、ギニアでジャンベが発展した理由は、独立時に首都のコナクリにリズムを集めて、国の舞踊団を作ったのが起源であり、そこから元々のリズムにスピードと複雑さが加わり、村同士で速さの競争が始まったと述べた。

続けて生演奏で割礼の儀式のときのリズムが披露され、「こうしたリズムも千年前から同じではなく、日々変化しているのではないか。日本では途中で文字文化が生ま



ギニア＝三島村の報告
徳田健一郎氏（左）とみしまジャンベスクールOB

れたので、形式を残すのが伝統文化と勘違いされるが、無文字社会のなかでは変化するのが当然」と語った。

氏はまた「ジャンベは乗りやすいリズムで、子供たちのハートを釘付けにするが、彼らにアフリカの伝統のリズムを教えると同時に、それを三島村の伝統文化とも関連付けて、故郷を大切に思う心も育てていきたい」と今後の抱負を語った。

続けて、法文学部経済情報学科教授の西村知氏が「ジャンベのグローバルな浸透力」は何によるのかというテーマで話をした。大きな理由として、航空運賃の低下やインターネットの普及でルーツへのアクセスが容易になったこと、またケイタ氏や徳田氏のような個人のカリスマ性にもよるところもあると指摘し、「三島村のジャンベスクールはアジアのジャンベ文化のハブになり得る。そのカッコよさに若者たちのプライドが刺激されれば、ますます発展する」と将来への期待が語られた。

韓国・全羅南道

韓国からは、鹿児島大学の学術交流協定校である木浦大学から、同大教授で歌手で鼓手でもあるという多才な李允先氏を歌手として、また同大史学科副教授ですぐれた仏教史研究家である崔鉉植氏を通訳として、さらに京仁教育大学教授でパンソリ研究の第一人者である金恵貞氏を発表者としてお招きした。

金氏は韓国で最も有名な伝統歌謡であるパンソリについて、その「地域的基盤」というテーマで発表をし、李氏が全羅南道の民謡やパンソリの実演を披露した。

金氏は西道、京畿道、南道、東部、済州島という韓国の各民謡圏の発声の特徴を自ら歌いつつ比較し、南道が音が最も低く、喉を抑えて、引っ張るように歌うと指摘し、パンソリは全羅道のいろいろな民謡の発声法を工夫したものであり、全羅道以外の人がパンソリを学ぶのは容易ではないと述べた。

氏によれば、今日のパンソリ歌手や人間文化財は全員が全羅道の出身で、パンソリを専門に演奏する団体も全羅道地域にある。指導者の中には、パンソリは全羅道の出身の人でないと教えられないとまで言う人もいる。韓国において民謡はそれほど地域に根付いている。たとえば、ソウルでパンソリをやっても反応は冷たい。それは全羅道でソウルの音楽をやっても同様である。

パンソリの成立は18世紀に遡り、19世紀に入ると全羅道以外の地域にも広がった。パンソリのパンは「家の小さな庭」の意味であり、最初は平民のものであったが、両班階級が関心をもつようになると歌詞も変わり、漢文小説や歴史的な故事などの内容が入るようになり、音楽的にも上層部の音楽の影響が見られ、歌詞も文字によって記

録されるようになったという。

パンソリは一般人が日常的に歌うのではなく、専門家が聴衆を相手にして公演する音楽であり、それゆえ時代による変化が激しい。最近では「スタークラフト」などのようにゲームをテーマにしたパンソリもある。1980年代、民主化運動が盛んであったときには、光州事件をテーマにした政治的なパンソリも作られ、90年代になると童話やお菓子をテーマとするパンソリができたという。

ちなみに、韓国の小学校では4年生になると教科書でパンソリを学ぶ。専門家養成教育は芸術高校と音楽大学で行われているが、専門家になる人は、幼い頃から指導者の元に通って覚えるという。

シンポジウムのテーマである「歌は地域を救えるか？」という問いに対しては、金氏は力強く「イエス」と答えた。歌は感情表出の手段であり、民謡では泣き方ひとつとってもその地域独特の泣き方があり、聴く方も自分の地域の泣き方でなければ哀しくはならない。つまり民謡は地域単位で感動を生み、人々を結びつける。方言がなくならないうちは、地域独自の音楽やアイデンティティもなくならないうちであろうし、このことは文化的価値とともに経済的価値も生むだろう、というのが金氏の見通しであった。

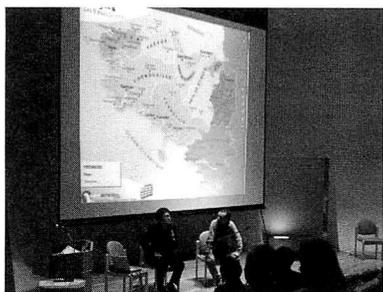
フランス・ブルターニュ

ブルターニュからは、この地域の代表的な民謡歌手ヤン＝ファンシュ・ケメネール氏が出演する予定であったが、シンポジウムの一ヶ月ほど前に急病で入院したため、急遽エリック・メヌトー氏に代役を務めていただいた。まだ33歳の若いメヌトー氏はパリの生まれで、12歳のときに旅行で訪れたブルターニュで、たまたまフェスト＝ノースに出会ってブルターニュ民謡の世界に入ったというユニークな経歴をもつ。1999年からはブルターニュ中部に移住し、そこを拠点に活躍している。

メヌトー氏によれば、ブルターニュ民謡においては、20世紀半ばまでは伝承の主役は口承であった。つまり、歌は皆が歌うものだったのでその継承も容易だった。農作業や夜の集いなど、伝承の機会は無数にあった。それはまるごと同じものを伝える



全羅南道の報告
右奥から李允先氏、崔鎭植氏、金恵貞氏



ブルターニュの報告
エリック・メヌー氏(右)と筆者

のではなく、各々が歌い方や歌詞に個人の色を加えつつ、ちょうど皆で一枚の絵を描くように伝承に参加するということだった。

その後印刷術が一般的になると、紙に印刷した「歌の瓦版」を、自ら歌いながら縁日や市場で売り歩く商人が登場するようになり、その姿は1960年代まで見かけられた。

このような状況に変化が生じるのは、義務教育が始まり、若い世代がフランス語の読み書きができるようになる第一次大戦

後である。離農が加速し、1950年代になると、口承文化の伝承はほぼ不可能になる。かつて伝承の機会を提供していた共同作業もほとんど見られなくなり、ブルトン語を母語とする人々も姿を消していった。そこから、このままでは50年後には口承文化が途絶えることになるという危機感が生まれ、この流れを食い止めようという動きが現れるようになる。

その一例として、メヌー氏は、自分の師のひとりである歌手のエリック・マルシャンのケースを挙げた。今日のブルターニュを代表する歌手の一人である彼がブルターニュの歌に関心を持ったのは1975年頃。1913年生まれの“マニュ”・ケルジャンという歌手の家に住み込み、一緒に畑仕事をしながらそのレパートリーを覚えたという。しかしこのような伝承方法はいまでは不可能であり、現在エリック・マルシャンは職業訓練組織を立ち上げることで後進の歌手や演奏家にその知識を伝授している。

またブルターニュには各村に一つは伝統音楽を学べる学校もあり、講習会も休暇中などに頻繁に行われているという。そこでは大人も子供も参加できるプログラムがあり、また伝統音楽の教員資格を取得することもできる。さらに口承文化を音や映像として保存する「ダステム(収集)」という収集家の組織も存在し、その膨大な資料にはインターネットを通じて直接アクセスすることができる。

メヌー氏はまた、2000年代に入ってソーシャルネットワークやビデオの共有が盛んになっており、これは伝統音楽の愛好家には多くの音楽にアクセスするチャンスであり、現代版の夜の集いとなる可能性がある」と指摘した。

パネル・ディスカッション

各地域の発表後、シンポジウムの参加者と通訳を交えて、全員でパネル・ディス

セッションが行われた。1時間という短い時間ではあったが、充実した議論が展開された。以下、そこで印象に残った幾つかの発言を記してみたい。

シンポジウム全体の感想を聞かれて、

「他の国から学べるものが沢山あることが分かった。視野を広げる良い機会になった」(李氏)。

「各地域の状況に多くの共通性が確認されたが、継承の仕方には相違があるのは、おそらく歴史的背景によるのだろう」(金氏)。

「世界の離れた地域の人たちがこうして実際に知り合うのは大切。われわれはマイノリティなので連帯が必要だ」(メヌトー氏)。

「これまでは本能的に歌ってきたが、これをきっかけに自分のやってきたを見つめ直そうという気になった。国に帰ってもっと一生懸命にやらなければいけないと思う」(ペイン氏)。

「ネットの書き込みを通じて知り合うこともあるが、このように実際に会おう場を持つことは大切だ」(徳田氏)。

「こうしたネットワークができたことが重要。韓国ではアリランをユネスコの文化遺産にしようとしている。こうした伝統文化の保存は世界共通の問題であり、今度は韓国でもこのような集まりをやりたい」(金氏)。

それぞれの参加者にとって民謡とは何かと問われて、

「それぞれの伝統歌謡は文化の反映。それが消え去るのは許し難い。今後30年で3,000の言葉が消失すると言われている。その保存は急務である」(メヌトー氏)。

「自分の土地に根付くことがまず大切で、それがビジネスにせよ何にせよ成功する上で大きな力になるはずだ」(ペイン氏)。

「伝統が何かを言うのは難しいが、少なくともその大切さは、アフリカの文化を通して三島村で伝えていくことができると思う」(徳田氏)。

「珍島で民謡に囲まれて育ったが、民謡というものは変化しなければならない。奄美の事例なども参考にしつつ、どう変化すればいいのかということを今後の研究にも反映させたい。」(李氏)。

「20代で民謡調査をしていた頃、学校など行ったことのない無学な人から、歌に関する5つの箴言を聞いた。まず第一に、「歌を歌えない人間はいない。話すことができれば、人は歌える」。二番目は、「話は作るものだが、歌は心を込めるものである。感情を隠すことができないのが歌である」。三番目は、「これは私の歌



だ。自分の感情を込めて作った歌だ」。四番目は、「歌があったからこそ生きてこれた。死ぬほど辛い時期を乗り越えたのはこの歌のおかげだ」。五番目は、「歌はモルヒネである。労働も歌いながらやれば辛い」。このような言葉が無学な人の口から語られて本当に驚いた。自分が若かったときはこの言葉をなかなか理解できず、歌は楽しいときにだけ歌えばいいと思っていたが、子供ができて本当に肉体的に辛い時期に、知らないうちに自分も歌うようになっていた。そして本当に辛い時期には自分で自分の歌を作って歌った。その後、辛さを乗り越えて、肯定的な気持ちになることができた。それ以来、さらに熱心に民謡を研究するようになっている」(金氏)。

コンサート

シンポジウムの翌日の13日(火)には教育学部食堂「エデュカ」でコンサートを行なった。会場は開始時間の18時半にはほぼ満員になり、途中からは立ち見も出る盛況となった。

最初に登場した韓国・全羅南道は、李氏の歌に金氏の太鼓と解説が加わり、まずパンソリ、次いで江原道、ソウル、珍島の3種類のアリランを、歌詞に「珍道」や「奄美」や「鹿児島」を織り込みながら披露し、最後は聴衆の歌声と一体になって「カンガンスルレ」で締めた。

ブルターニュのメヌー氏は、この地方の代表的な民謡であるカン・ア・ディスカンや最も有名な叙事歌(グウェルス)の「スコルヴァン」、さらには早口言葉のような数え歌「セリー」などを見事に歌って聴衆を沸かせた。

多才なジム・ペイン氏は、ニューファンドランドの木挽き歌と漁師の歌を無伴奏で聞かせた後、アコーディオンやギターを弾きながら陽気に会場を盛り上げ、最後はタップダンスまで披露してくれた。

三島村のジャンベスクールからは10数名のメンバーが集結し、強烈なビートと歌



と踊りで聴衆を圧倒した。途中からはブルターニュでアフロバンドのボーカルも務めるメヌー氏も飛び入りし、ブルターニュ民謡とジャンベの（おそらくは日本で初めての）共演が実現した。

奄美島唄では、坪山・皆吉両氏の歌に加え、喜界島から若手の川畑さおりが参加して十八番の「むちゃ加那」を披露した。最後の「六調」では泉茂光氏の迫力あるチジンも加わり、会場の人たちと一緒に手踊りで盛り上がった。

多くの点で実りの多いイベントであったが、海外招聘者に1人のキャンセル、1人のメンバー交代があり、オーガナイザーとしては最後まで緊張を強いられることになった。結果的には予定されていた5つの地域がすべて参加できたものの、つくづくシンポジウムは生ものであると痛感させられた。

* * *

さて、本報告書は、すべてシンポジウムの参加者たちによる原稿からなるが、シンポジウムの再現を目指したものではない。原稿のほとんどは、この報告書のために新たに書き下ろされたものであり、そのなかにはシンポジウムでは歌手として活躍された方の原稿も含まれている。なお各地域の順番はすべてシンポジウムのプログラム順である。以下、それぞれの報告について簡単に解説したい。

最初の奄美民謡に関する拙論は、奄美大島で最初の民謡コンクールが行われてからの島唄の歴史を、地元の南海日日新聞の記事を辿りながら振り返ったものである。一部はシンポジウムの発表と重なるが、内容的にはずっと詳しくなっている。もちろん本番での坪山氏の発言や歌唱はすべて省略せざるを得なかったが、氏の指摘は全体の構成を考える上で大いに参考にさせていただいた。記して感謝したい。

次のニューファンドランドだが、ハイワード氏の論考はシンポジウムの前に発表原稿として送られてきたものである。本番ではこの原稿を元に森野氏が発表した。歌手のジム・ペイン氏からは、自分自身の伝統歌謡との関係を振り返った魅力的な一文が届いた。ニューファンドランドの伝統歌謡の現場の声を伝える貴重な証言であると思



コンサート会場風景

う。長年のウェールズ研究で培った知見に溢れた森野氏の丁寧な解説と併せて読んでいただければ、いっそう興味深いだろう。

ギニア＝三島村のジャンベについては、シンポジウムで報告を担当したのは徳田氏であったが、報告書の執筆は、氏の希望もあって西村氏にお願いした。経済学者にしてジャンベ奏者という珍しいキャリアを持つ氏ならではの刺激的な論考で

ある。また徳田氏からは、実践者としての立場からの一文が、三島村のジャンベスクールの雰囲気伝えるたくさんの写真とともに届いた。

韓国・全羅南道では、ちょうどパンソリの名歌手たちとその系譜に関する本を出版されたばかりの金氏から、伝統の継承という視点からパンソリを紹介する貴重な論文が送られてきた。またシンポジウムでは歌手として活躍された李氏からも、木浦の公演芸術の歴史を詳述した力作をいただいた。どちらも日本では初めて紹介される事柄であり、このような論考を日本語で読めることは大変に喜ばしい。

最後のブルターニュであるが、メヌー氏の論考は、シンポジウムにおける報告にカン・ア・ディスカンに関する説明を書き加えたものである。大学では数学を専攻したという氏の分析力と、実践者としての経験に裏打ちされた大変に興味深い内容のテキストである¹。氏の論考への前置きとして、ブルターニュにおける歌の歴史を概観した拙論も付け加えた。併せてお読みいただければと思う。

いずれにせよ、集まった原稿は力作ぞろいであり、これだけ質の高い論考が収録された報告集を刊行できることを率直に誇りに思う。

皆さん、どうもありがとう！ アリガッサマリョウタ！ Thank you very much! Merci beaucoup! 감사합니다! Trugarez!

注

1 メヌー氏のテキストの楽理的な部分の翻訳に当たっては、声楽家の遠藤圭子氏に多くのご教示を受けた。ブルターニュ音楽のファンでもある氏は、素人には分かりにくいメヌー氏の直感的な表現を丁寧に解きほぐして解説して下さいました。この翻訳が少しでも分かり易いものになっているとすれば、それは氏のおかげである。記して感謝したい。